

1944年の東南海地震と津波の体験談に見る 被災者の避難行動

川 窪 広 明

要 旨

尾鷲市と紀北町で作成された3編の1944年の東南海地震体験談集の被災者の記述から、地震発生から地震停止、地震停止から津波来襲、津波来襲後という3つの時間帯における人々の行動を分析した。その結果、まず地震発生後は、被災者の多くが地震発生後に屋外に脱出したことがわかった。地震終了後は自宅で被災した人の多くが避難行動を取っていたのに対し、自宅以外で被災した人の多くは帰宅を試みていたことがわかった。

また、津波来襲の情報取得方法を自己判断・予感、目撃、他人からの伝聞に分類すると、避難のきっかけとなった津波情報は他人からの伝聞が最も多く、津波来襲を予想してもすぐに避難しなかった人が多かったことがわかった。これは、尾鷲地方で「地震の揺れが収まってから津波来襲までご飯を炊く時間がある。」という古くからの伝承が広く信じられていたためと考えられる。

さらにこれらの体験談集には、津波の犠牲となった人についての記述もあった。犠牲者の多くは、自宅から家財道具を持ち出そうとして逃げ遅れた、あるいは第1波の津波が去った後、家に戻ったところを第2波の津波に呑み込まれたものであることがわかった。

キーワード：東南海地震、津波体験談、避難、尾鷲市、紀北町

1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災直後にニュースで放映された、逃げ遅れた人や道路を走行する自動車が来襲した津波に呑み込まれてゆく映像は衝撃的であったが、同時

に過去に何度も津波被害を受けている三陸沿岸地域の住民が、なぜ過去の教訓を活かして直ちに避難しなかったのかという疑問を抱かせた。東日本大震災における住民の避難行動については、行政や民間のリサーチセンター、研究者などによる多くの調査報告書が Web 上で公開されている。これらの報告書からは、被災者に対する被災場所、地震、津波に関する情報取得方法、津波到達までの行動、地震発生から避難開始までの時間、避難の手段、過去の被災経験や伝承と今回の避難行動の関連性などの調査結果を知ることができる。^{注1)}

また、東日本大震災の1年後に衛星放送のヒストリーチャンネルで放映された「津波列島～忘れられた教訓～」では、日本は古文書や伝承による津波に関する記録が最も多く残されている国であり、昔から存在する街道や集落の神社の位置が東日本大震災の津波浸水ラインと一致するという興味深い事実が紹介された。有史以来、北海道から沖縄まで大きな津波に襲われてきたわが国に多くの記録が残されているのは当然のことといえるが、この番組にも出演している都司嘉宣は、著書「千年震災 繰り返す地震と津波の歴史に学ぶ」の中で、日本各地に残された津波の歴史資料を収集し詳細な分析結果を報告している。この本を読むと、津波対策にとって「歴史に学ぶ」ことがいかに重要かを痛感できる。すなわち、津波を免れた人はどのような行動を取ったのか、逆に犠牲となった人はどのような行動を取ったのかについて過去の記録を読み解くことは、今後の津波対策の重要なヒントになるということである。

ところで地震には、海側のプレートの沈み込みによって陸側のプレート内部に生じた歪みを解消する動きにより陸の浅い場所で発生する内陸地震と、海底において海側のプレートが潜り込むときに生ずる歪みが限界に達したとき、陸側のプレートが急激に元に戻ろうとする動きによって発生する海溝型地震がある。近年発生した地震については、1995年の阪神・淡路大震災は前者、2011年の東日本大震災は後者のタイプの地震である。紀伊半島の熊野灘に面する沿岸一帯も、三陸沿岸同様、有史以来、海溝型地震による津波の被害を何度も受けてきた。表1は、三重県尾鷲市の郷土史家である倉本為一郎の「昭和地震史」^{文2)}に紹介されている紀伊半島東岸を襲った明治までの地震と津波の記録をまとめたものである。これらの地震は、伊豆半島から四国沖にかけて南より移動してくる海側のフィリピン海プレートによる海溝型地震であり、倉本によると明治32年の南海地震以外は、地震後に津波が来襲し、紀伊半島一帯に大きな被害を与えている。

2. 研究の目的と方法

昭和19年（1944年）12月7日午後1時35分に発生した熊野灘を震源とするマグニ

(表 1) 紀伊半島東部を襲った地震

年月日 (カッコ内は西暦)	地震の種類	間隔 (年)	概要
天武12年 (682年) 10月14日	南海地震		古書(日本書紀)に記述がある最初の南海道地震。地震に続いて沿海の地には津波が来襲した。
仁和3年 (882年) 7月30日	南海地震	200	津波が、紀伊半島から摂津の海岸(現在の大阪湾から神戸市に至る海岸)まで襲った。
元弘(1331年) 元年7月3日	東海地震	449	紀伊地震により千里ヶ浜が隆起して二十余町(約0.2平方キロメートル)の陸地となった。
正平15年 (1360年) 10月4日	南海地震	29	翌5日にも強い地震があり、6日の6時頃、尾鷲から兵庫に至る海岸に津波が来襲し、多数の死者が出た。震源は熊野沖の海底と思われる。
正平16年 (1361年) 6月24日	南海地震	1	この地震は摂津、大和、紀伊、阿波、山城の国に被害を及ぼし、津波が来襲した。被害状況から見ると、震源は紀伊水道の南方と思われる。
応永14年 (1408年) 12月14日	南海地震	47	この地震は紀伊国熊野および伊勢地方が最も強く、津波の来襲し、熊野神社本宮の温泉は80日間湧出が止まった。震源は熊野灘と思われる。
明応7年 (1498年) 8月15日	東海地震	90	紀伊の熊野では、本宮の社殿が倒潰するなどの被害があった。津波の来襲は、紀伊から房総にまで及んだようで、伊勢、志摩では約1万人溺死したといわれている。震源は東海道の少々遠い沖合の海底と思われる。
永正7年 (1510年) 8月8日	南海地震	12	この地震を強く感じたのは、河内、摂津両国であったが、沿岸部は津波に襲われた。震源は紀伊半島付近の海底であろう。
慶長9年 (1604年) 12月16日	東南海地震	94	この地震は古来有数の大地震で、東は犬吠崎から西は九州南部に及び、八丈島も大きな津波被害を受けた。伊勢沿岸では、地震の後にまず数百メートルの沖まで潮が引き、ついで津波が襲来したということであるが、記録はすべて失われており、今はこの模様を詳細に知る事ができない。
宝永元年 (1704年) *月日の記載なし	南海地震	100	紀伊半島の海岸一体に津波が来襲した。この津波は地震津波か風津波か明らかではないが、もし地震津波ならば、震源はおそらく熊野灘の海底で、次の宝永4年の大地震の前震である。
宝永4年 (1707年) 10月4日	東南海地震	3	東海道伊勢湾沿岸と紀伊半島の被害が特に大きく、この地震に伴った津波は、九州の東南部から伊豆半島に至るすべての沿岸の襲ったばかりではなく、紀伊水道から侵入して大阪湾および播磨灘にも達している。紀伊半島東部も津波の被害が大きく、中でも尾鷲は1,000人以上の死者を出した。また、この地震の約1ヶ月後に、富士山が爆発して宝永火口を形成した。
安政元年 (1854年) 11月4日	東海地震	147	11月4日9時頃、遠州灘東部の海底から発生したと推定される地震で、規模が非常に大きかった。家屋が倒潰した範囲は、現在の静岡、愛知、山梨、長野、三重の大部分、および近江の東半部、越前の南西部を含んだ3,600キロ平方メートルにも及んだ。津および松坂付近も局部的に震動が激烈であった。この地震による津波は房総半島から高知までの沿岸を襲い、莫大な損害をもたらした。尾鷲は波高6mくらいであったらしいが、人口の多いのと、道路系統が複雑なために14人の死者を出した。
安政元年 (1854年) 11月5日	南海地震	0	前日の大地震から約32時間を経て、5日17時頃南海沖から再び大地震が発生した。揺れの強かったのは、伊勢の周辺から九州の東北端に至る間で、紀伊半島の南西部は揺れが激烈であり、倒潰した家屋も非常に多かった。この地震に伴った津波は、恐らく房総半島から、九州の東岸までの海岸を襲ったのであろうが、紀州広村の浜口梧陵が、自分の稲村に火を放って村民を救ったのはこの津波の時のことである。
明治32年 (1899年) 3月7日	南海地震	45	この地震の震源は、北緯33度50分、東経130度30分の海底であり、和歌山、奈良および大阪は強い地震により多少の損害があつた。木本、尾鷲両警察署管内では、倒潰家屋35戸、破損家屋62戸、死者7人、また三重県全体の負傷者199人であった。

チュード7.9の東南海地震は、紀伊半島沿岸一体に大きな津波被害を与えた。現在の三重県尾鷲市には、地震発生の約15分後の午後1時50分に津波の第1波が到達した。さらにその後、第2波が午後2時7分、第3波が午後2時33分、第4波が午後2時58分、第5波が午後3時33分、第6波が午後4時13分に到達した。^{文3)}最大9mもの津波に襲われた尾鷲地区の人的被害は、死者40名（尾鷲38名、九鬼、早田^{注2)}2名）、負傷者40名、行方不明者2名であった。建物の被害は倒壊136軒（住居120、非住居6、工場6）、流出859軒、半壊275軒（住居197、非住居57、工場21）、浸水858軒と、被害を受けた建物は合計2,130軒であった。

ただし、この東南海地震が発生した昭和19年は第二次世界大戦の敗戦が濃厚となっていた時期で、地震に関する調査資料は極秘とされ、被害に関する報道も厳しく統制された。内閣府防災情報のホームページに掲載されている「災害教訓の継承に関する専門調査会報告 第6章 戦時下での地震」^{文4)}によると、この地震に関する記事は、地震発生から1945年3月末までの間、全国紙である朝日新聞や読売新聞にさえ、それぞれ11件、9件しか掲載されなかった。したがって、この地震に関する正確な情報を当時のメディアから得ることは不可能である。三重県や和歌山県の地元有志や公民館によって、被災者へのヒアリング調査をもとに体験談集が作られるようになったのは、終戦から約30年を経た1970年代からである。これらの体験談集を分析した研究として、木村^{文5)}や井若^{文6)}らの研究がある。木村は、三重県の38件の資料をもとに、津波と人間との遭遇と接触をそれぞれ5パターンに類型化して、津波との物理的近接性と生命への危険度とを関連付けている。また井若らは、安政元年の東海地震と南海地震、および昭和19年の東南海地震の資料を分析し、高知県、徳島県および和歌山県内の5地区について、人々の津波避難行動に関する考察を行なっている。

本研究では、まず「津波 デジタルライブラリ」^{注3)}から、(A)「昭和19年12月7日 東南海地震津波 体験談と記録集」、また尾鷲市立図書館から (B)「東南海地震体験談集 (昭和十九年十二月七日)」と (C)「平成十三年十二月 東南海地震体験談集」を入手した。これら3つの資料の概要は次の通りである。

(A) 昭和19年12月7日 東南海地震津波 体験談と記録集

1994年（平成6年）12月に海山町郷土史研究会、海山町郷土資料館より東南海地震五十周年記録集として発行された。この資料には、島勝、白浦、矢口、引本など現在の紀北町に含まれる集落別に行った体験談27件と手記12件が収録されている。

(B) 東南海地震体験談集 (昭和十九年十二月七日)

1995年（平成7年）3月に尾鷲市立中央公民館より発行された。この資料には、

1994年（平成6年）12月7日に尾鷲市中央公民館で開催された尾鷲測候所長の窪田武利氏の「地震と津波」という講演会や地震体験者による座談会の議事録の他、尾鷲市街地で被災した人の体験談50件が収録されている。

（C）平成十三年十二月 東南海地震体験談集

2001年（平成13年）12月に尾鷲市立矢浜公民館より発行された。この資料には、尾鷲市矢浜地区に住む被災者の体験談29件の他、この地震の規模や被害状況、嘉永の津波を記録した古文書も収録されている。

（表2）体験談集からの抽出内容

①	性別
②	当時の年齢
③	地震発生時にいた集落
④	被災した場所
⑤	地震開始後の行動
⑥	地震の時、見たこと、聞いたことなど
⑦	地震終了後の行動
⑧	地震終了後、見たこと、聞いたことなど
⑨	津波の情報をいつ、どのように得たか
⑩	津波来襲後の行動
⑪	津波来襲時、見たこと、聞いたことなど
⑫	避難場所
⑬	その他の記述

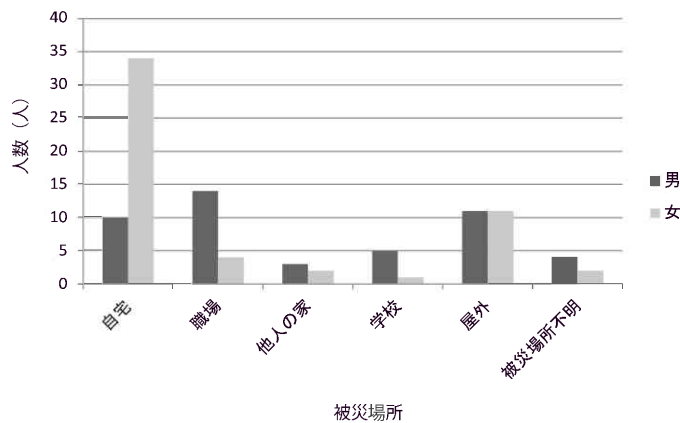
次に、この3つの資料に収録された体験談のうち、現在の紀北町と尾鷲市で被災した人の談話と手記101件（（A）37（体験談27件、手記10件、（B）50件、（C）14件）を選んで表2に示す13項目を抽出し、地震開始後、地震終了後、津波来襲後の行動、および津波情報の取得時期と取得方法を被災した場所ごとに時系列に沿った表として整理した。そしてこの表と、地震開始後、地震終了後、津波来襲後に被災者が見聞きしたことから、被災者の行動の特徴を分析した。

3. 結果

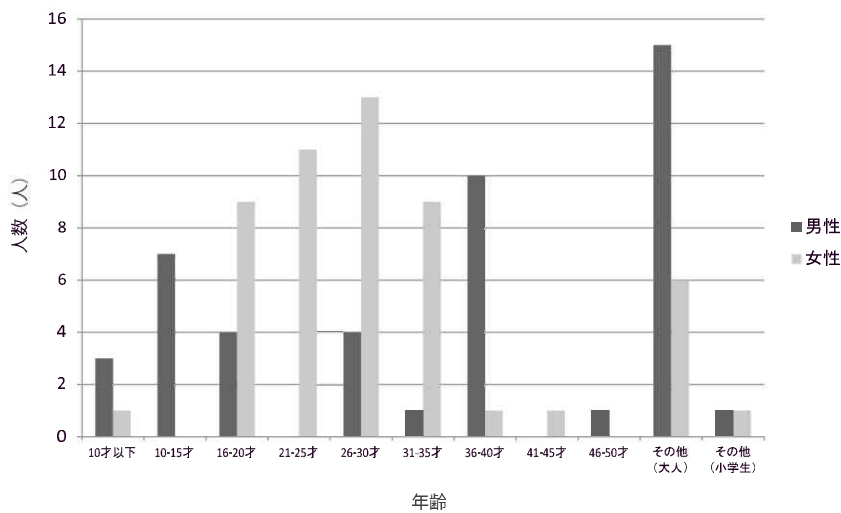
3-1 被災者の性別、年齢、被災した地区

図1は体験談に収められた被災者の性別を表すものである。体験談集全体では、男性47名、女性54名とほぼ同数であるが、自宅での被災者は、男性10名に対し女性34名と女性の方が多い。一方、職場での被災者は、女性4名に対し男性14名と男性が多い。

図2は被災者の当時の年齢を表すものであり、最年少が5才、最高齢が48才であった。図より、自宅での被災者には女性が多いが、職場での被災者には男性が多く、特に学校教員と造船所で働いていた人が多い。年齢がわかる体験談に限ると、男性は被災時に15才以下と36才から40才が多く、20才から25才までの年齢層はいない。体験談に「昭和16年12月に始まった太平洋戦争で、若い男子はみな兵隊にとられ、故郷尾鷲が津波の大被害をうけたことを知らず戦後復員してはじめて災害を知った人もあ



(図1) 被災場所別の被災者の性別



(図2) 被災当時の年齢

る。」(B2)とあるように、当時は太平洋戦争末期であり、この世代の男性は戦地に赴いていたことが原因であろう。女性については、16才から40才までの広い年齢層に渡っている。

また、体験談に年齢が表記されていない場合は、その他として大人か子ども(小学生)としたが、これらには4名の男性教員と4名の学生が学校の百周年記念誌に手記として寄稿した文章が含まれる。

図3は、体験談の被災者が地震開始時にいた集落と人数を地図上に示したものである。集落別では、現在の尾鷲市街を中心とした尾鷲湾地区が42名と最も多く、続いて現在の紀北町の島勝と矢口の12名であった。また、尾鷲湾で乗船中に被災した人が2

名いた。なお、B23の「下谷」については、現在の地図上では位置を特定することができなかったが、地震終了後の行動から尾鷲湾地区周辺の山中の地名と考えられる。

3-2 被災者の行動表

表3は、体験談の内容から被災者の行動を抽出し、地震開始から地震終了まで、地震終了から津波来襲まで、そして津波来襲後から津波終了までの3つの時間帯に分けて整理したものである。表の作成は、次のようなルールで行った。

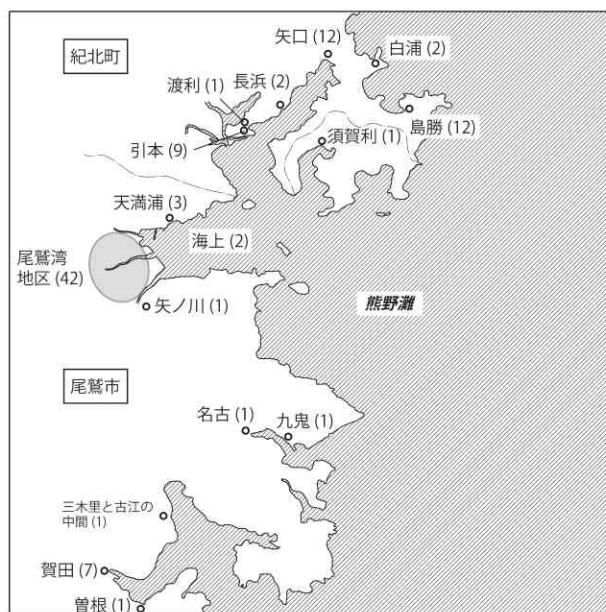
- 1) 地震終了については、「やっと地震が終わった時」(B1)のように明確な表現がある場合、そこを区切りとした。

- 2) 「一間くらいはなれて

いるトコやさんと、その道の向かいにある家の瓦と瓦が道の真ん中でくつつくぐらい大きな横揺れになってきた。これは危ないと思い、思わず愛宕山へ登ろうとして、その下まで逃げたら、消防の人が「愛宕山の忠魂碑の石がまわってくる……」と言ったので、今度は宮さんまで走った。」(A2)のように時間帯の切り替わりについて明確な表現がない場合は、「地震開始後に愛宕山に避難」、「地震終了後に神社に避難」のように地震の継続時間を考慮して区切りとした。

- 3) 同じ時間帯の行動については、行われた順に記述し矢印(→)で結んだ。

- 4) 被災者が津波来襲の情報を得た方法は、「古い書き物に書いてあったのを見たのか、その話を思い出した。」(B18)といった書物や親などからの伝承を思い出した表現、あるいは「津波はひっとしたらくるかわからんで、早く逃げなあかんとおもて、工場へ戻った。」(B50)という直感の表現による 1) 自己判断、「自転車車で家へ帰る途中、赤石まで来たら波がやってきた。」(A29)「海を見ると、海の底が真っ赤になって、しばらく引いていた。」(A15)という津波の前兆や「自



(図3) 被災者が地震発生時に被災した地区
(カッコ内は被災者数)

(表3) 被災者の行動

自宅										
番号	資料番号	性別	年齢	地区	被災場所	地震開始後	地震終了後			津波来襲後
1	A 1	女	33	島勝	自宅	不明	3 避難(裏山)			
2	A 3	女	29	島勝	自宅	屋内	4 避難(愛宕山)			2
3	A 4	女	33	島勝	自宅	屋内	不明			
4	A 6	女	34	島勝	自宅	屋内	3 避難(天神さん)			3
5	A 7	女	35	島勝	自宅	不明	4 子どもの捜索→避難(山)			
6	A 8	女	33	島勝	自宅	4 避難(竹藪)	帰宅(高台)			3
7	A 9	女	35	島勝	自宅	屋内	浜	3	避難(愛宕山)	
8	A 10	女	37	島勝	自宅	4 避難(愛宕山)				
9	A 13	女	25	白浦	自宅	4 避難(高所にある墓地)	3			
10	A 15	女	25	白浦	自宅	屋外 4 避難(高所にある墓地)	帰宅(高台)	3		
11	A 16	女	27	矢口	自宅	屋内	3 避難準備			2 避難(墓地)
12	A 17	女	28	矢口	自宅	4 避難(墓地)	帰宅	3	避難準備	3 避難(奥の方)
13	A 18	女	28	矢口	自宅	屋内	1 食料を高所に運ぶ→帰宅→避難(高所)→<帰宅を止められる>			2
14	A 19	女	24	矢口	自宅	屋内	1 子どもを逃がす			2 避難(失敗)→流される
15	A 20	女	27	矢口	自宅	屋外	庭をうろつく	3	避難(裏山)	2
16	A 23	女	33	矢口	自宅	不明	後片付け	3	避難準備	2 避難(学校)
17	A 24	女	21	引本	自宅	屋内	海に転落→他人宅で着替え			3 避難(浜役場の広場)
18	A 25	女	22	引本	自宅	屋外	3 避難(学校)			2
19	A 27	女	30	引本	自宅	屋外	3 避難(本町の親戚の家)			
20	A 28	女	29	引本	自宅	屋外	4 避難(天理教寺院)			2
21	A 32	女	5	矢口	自宅	4 避難(叔父に抱かれて市場)	帰宅	3	避難(神社)	2 避難(学校)
22	B 9	男	県の嘱託	尾鷲湾	自宅	屋内	2,3 避難(山)			2
23	B 11	女	主婦	天満浦	自宅	屋内	屋外で立話	1	浜	3 帰宅→避難(山)
24	B 12	男	店主	尾鷲湾	自宅近所	屋外	1 子どもの迎え			3 家族を逃がす→役場へ行く
25	B 19	男	37	尾鷲湾	自宅	屋外	1 服を着替える			3 避難(尾鷲小学校)
26	B 20	女	17	尾鷲湾	自宅	屋内	家にいた(楽観的)			3,2 水に浸かる→避難(尾鷲駅)
27	B 21	男	28	名古	自宅	屋外	3,2 帰宅→母親を逃がす			2 流される→避難(高台)
28	B 24	女	44	尾鷲湾	自宅	4 避難(空き地)	帰宅	1	避難準備	3 避難(新道)
29	B 25	女	主婦	尾鷲湾	自宅	4 避難(中村山)	2			
30	B 26	男	48	天満浦	自宅	屋外	1 海を見ていた			2 避難(山)
31	B 27	男	小学生	天満浦	自宅	4 避難(竹藪)	3	浜	3	避難(天倉山)
32	B 28	女	23	賀田	自宅	不明	子どもの迎え			2 避難(高台)
33	B 34	男	37	賀田	自宅	不明	浜→帰宅→避難準備			3 避難(高台)
34	B 35	男	40	尾鷲湾	自宅前	屋内	1	子どもの迎え→帰宅		3 家族を逃がす→役場へ行く
35	B 36	男	11	尾鷲湾	自宅	屋内	弟の迎え	3	避難(高台)	

自宅

番号	資料 番号	性別	年齢	地区	被災場所	地震開始後	地震終了後	津波来襲後
36	B 37	女	18	尾鷲湾	自宅	4 避難(浜)	帰宅	1,2 避難(高台)
37	B 38	女	38	尾鷲湾	自宅	屋外	帰宅	1 米を炊く 3 避難(新道)
38	B 42	女	30	尾鷲湾	自宅	屋内	3 避難(裏山)	
39	C 1	女	24	尾鷲湾	自宅	屋内	4 避難(中学)	
40	C 2	女	20	尾鷲湾	自宅	不明	3 避難(山)	
41	C 3	女	29	尾鷲湾	自宅	不明	3 避難(神社)	
42	C 8	女	19	尾鷲湾	自宅	屋内	3 避難(高所)	
43	C 10	女	21	尾鷲湾	自宅	屋内	3 避難(高所)	2 帰宅を試みる
44	C 12	男	18	尾鷲湾	自宅	屋外	3 帰宅(自宅が高台)	

職場

番号	資料 番号	性別	年齢	地区	被災場所	地震開始後	地震終了後	津波来襲後
45	A 14	男	38	長浜	職場(造船所)	屋外	自転車で帰宅を試みる	2 水に浸かりながら峠を登り切る
46	A 21	男	校長	矢口	職場(小学校)	4 避難(不明)		
47	A 29	男	18	長浜	職場(造船所)	屋内	3 自転車で帰宅	2 避難(引本公園)
48	B 1	女	教員	須賀利	職場(小学校)	屋内	3 避難(裏山)	2 避難(裏山)
49	B 4	女	19	尾鷲湾	職場(中電)	屋内	片付け	2,3 避難(裏山)
50	B 7	女	27	尾鷲湾	職場(百五銀行)	帰宅	職場に戻る	2 帰宅→避難(高所)
51	B 8	男	14	引本	職場(造船所)	避難(広場)	2 帰宅(手こぎ船で)	
52	B 14	男	教員	尾鷲湾	職場(小学校)	帰宅	4 避難(山)	
53	B 15	男	教員	尾鷲湾	職場(学校)	屋内	児童と話	3 学校に留まる
54	B 16	男	工員	尾鷲湾	職場(工場)	屋外	帰宅を試みる	3,2 帰宅
55	B 22	男	39	尾鷲湾	職場(検目舎)	屋外	帰宅	職場に戻ろうとする 2 半鐘に登る
56	B 39	男	32	尾鷲湾	職場(屋外)	屋内	3 仕事を続ける	3 避難(水産試験場) 2 避難(瀬木山)
57	B 41	男	工員	引本	職場(造船所)	屋内	帰宅	3 避難(山) 2
58	B 44	女	19	尾鷲湾	職場(小学校)	4 避難(竹藪)	学校に戻る	3 避難(中村山)
59	B 45	男	会社員	尾鷲湾	職場(運送会社)	屋外	職場に戻る→帰宅	3 避難(大正町) 2
60	B 46	男	教員	尾鷲湾	職場(学校)	屋外	3 避難せず(学校に留まる)	
61	B 50	男	30	尾鷲湾	職場(製材所)	屋外	帰宅 1 職場に戻る→井戸をのぞく	2 屋内 3 帰宅→避難(中学校)
62	C 11	男	27	尾鷲湾	職場(造船所)	不明	井戸をのぞく 2 職場に留まる	3 避難(本家)

他人の家

番号	資料番号	性別	年齢	地区	被災場所	地震開始後	地震終了後	津波来襲後
63	A 26	男	19	引本	他人の家	帰宅	1 避難(引本公園)→近所の人の避難を助ける	2
64	B 10	女	<大人>	曾根	役場	屋外	帰宅を試みる	2.3 避難(山)
65	B 40	女	40	尾鷲湾	他人の家	屋外	帰宅 3 家で過ごす	2 子どもの捜索→避難(学校)→避難(中村山)
66	B 43	男	14	尾鷲湾	他人の家	屋内	帰宅→浜	2.3 帰宅
67	C 6	女	25	尾鷲湾	他人の家	屋内	4 避難(神社)	3 避難(寺山)

学校

番号	資料番号	性別	年齢	地区	被災場所	地震開始後	地震終了後	津波来襲後
68	A 12	女	小学生	島勝	学校(教室)	屋内	校庭	3 避難(裏山)
69	A 22	男	10	矢口	学校(教室)	校庭		2 避難(山の中腹)
70	A 31	男	16	引本	学校(教室)	校庭	3 手伝いに出た	2
71	A 36	男	14	渡利	学校	帰宅	家に向かう	2 避難(天理の竹藪)
72	C 13	男	13	尾鷲湾	学校(教室)	校庭	3 校庭	3 叫びながら下りてくる人を見て、山に登る
73	C 14	男	11	尾鷲湾	学校(校庭)	校庭に伏せる	帰宅 3 避難(中学校)	

屋外

番号	資料番号	性別	年齢	地区	被災場所	地震開始後	地震終了後	津波来襲後
74	A 2	女	38	島勝	屋外	4 避難(愛宕山)	4 避難(神社)	2 避難(寺)
75	A 5	女	34	島勝	屋外	屋外	4 帰宅→避難(裏山)	
76	A 11	女	32	島勝	屋外(裏山)	屋外	帰宅 3 避難(愛宕山)	
77	A 30	男	8	引本	屋外	3 避難(津呂町の親戚)	3	
78	A 33	男	教員	矢口	屋外(山の段々畑)	畑に座り込む	仕事を再開→帰宅	3 避難(トンネル) 2
79	A 34	男	教頭	矢口	屋外(山)	屋外	集落に戻る	2 避難(学校)
80	A 35	男	13	不明	屋外(山)	不明	学校に戻る	2
81	A 37	男	教員	九鬼	屋外(山の実習上)	しゃがんで手をつく	校庭に集合する	1.2
82	B 3	男	船員	海上	屋外(海上)	船中		2 船中
83	B 5	女	16	矢口	屋外(浜)	屋外	3 避難(山)	
84	B 6	女	<大人>	賀田	屋外	屋外	1 知り合いの家に走る	2 波にのまれる→<救助>
85	B 13	男	5	海上	船中	船中	3 船中	2 船で流される
86	B 18	女	17	尾鷲湾	屋外	畦道に伏せる	不明	
87	B 23	男	39	下谷	屋外(山)	屋外(山)	下山	3 帰宅
88	B 29	女	28	賀田	屋外	4 避難(高所)	4 帰宅→避難(寺)	3
89	B 30	女	主婦	賀田	屋外	帰宅	井戸のポンプを押す 2 避難(不明)	
90	B 31	女	30	賀田	屋外(畑)	帰宅	家で過ごす	3 避難(不明)

転車で家へ帰る途中、赤石まで来たら波がやってきた。」(A14)という上陸した津波の目撃、あるいは「急にゴーゴーと凄い音がしてきて大きな波が家々をのみながら押し寄せてきた。」(A20)という聴音の表現を2)目視、「聞もなく高町の方から津波だと大声をたてて大勢の人達が走ってきた」(B19)という避難する人の声を聞いた、あるいは「家に帰ると言ったら、今帰ったらあかん、津波がくるんで、逃げなあかんと言われて、始めて津波のことを知った。」(B36)のように家族や近所の人から直接津波の情報を聞いた表現を3)伝聞とした。また、体験談中に津波情報取得の表現がないものを4)記述なしとして表中に番号で表現した。

5) 目視と伝聞による津波情報の取得時期の判断は、

- ① 目視……「海底を見た」、「沖に津波を見た」、「川底が泡立った」などの表現は地震終了後、「避難開始の際に上陸した津波を見た」、「川の水が逆流してきた」、「津波に流された」などの表現は津波来襲後とした。
- ② 伝聞……「海の様子を見るため浜に出ていた人の声を聞いた」、「家族や近所の人の「津波が来るかもしれない」という声を聞いた」などの表現は地震終了後、「家の前を逃げる人の声を聞いた」、「高所から避難を即す声を聞いた」など表現は津波来襲後とした。

6) 被災者が避難行動を起こした津波情報を網掛けで示した。

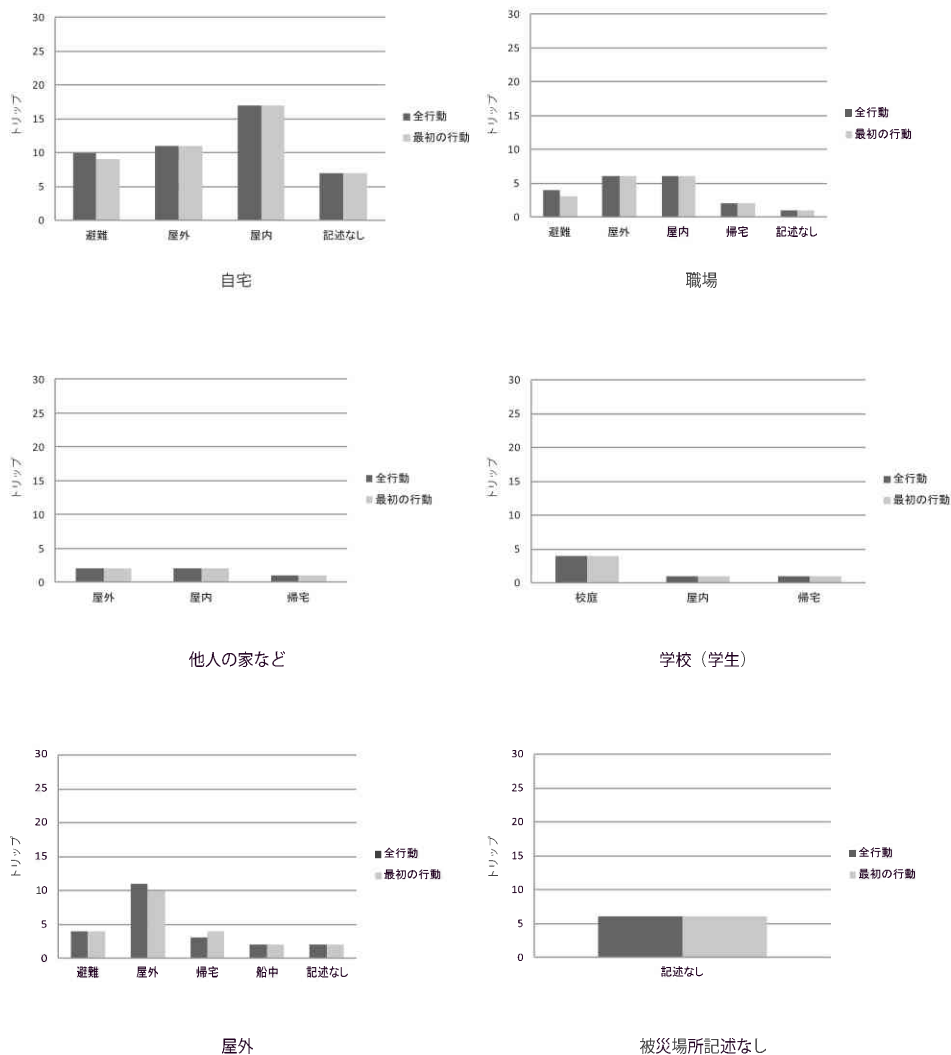
4. 考察

4-1 各時間帯の被災者の行動

4-1-1 地震開始後の行動

図4は、地震開始後の被災者の行動を表したものである。グラフの縦軸の単位は、トリップである。トリップとは、ある目的を持って起点から終点へ移動する際の一方向の移動を表す概念であり、同時にその移動を定量的に表現する際の単位である。

地震開始後の行動については、どの被災場所においても被災者のすべての行動（全トリップ数）と最初の行動の数がほぼ等しいことがわかる。これは、被災者が揺れの中を必死で避難するか、揺れが終わるまでその場に留まること以外にできなかったことを示している。地震開始時に自宅にいた人44名のうち、42名が自宅内に、2名が自宅のすぐ前にいた。自宅内にいた人の地震開始後の行動については、行動の記述がある35名のうち20名が揺れの中を屋外に脱出しており、そのうち10名が地震避難している。室内に残った人の記述にも、次のような「屋外へ脱出を使用としたができなかった」という表現が見られる。^{注5)}



(図4) 地震開始後の被災者の行動

- ・ 子供が七人いて、一番下の子がしがみついてきて、はなさないのです。着替えをしようとしてもなかなかできませんでした。(A6)
- ・ 突然の地震、下へおりようとして階段へ行ったが、階段が大きく上下左右にゆれて、おりることができなかった。(A24)
- ・ その時地震が揺れてきたので、外に出ようとしてガラス戸を開けようとしても、開かない (B9)
- ・ 子供を横抱きに階段の踊り場まで出たが降りられず (B11)
- ・ 2階で寝ておったが、なかなかひどい地震で、2階から降りるのに、ヨタヨタし

～いもて降りた。(B43)

- ・ 家が揺れだしその揺れがだんだん大きくなり階段を下りることも出来ず布団をかぶってしゃがみ込んでおりました。(C10)

これらの表現から、地震の揺れは被災者に屋内にいることが危険であると感じさせるものであったことがわかる。しかし、実際は震度5の強震^{文7)}であったため、多くの人が揺れの中を何とか屋外に出ることができた。

また、自宅以外で被災した人についても地震開始後は屋外が多く、特に屋外で被災した人については、次のようにその場を動けなかったという記述が多い。

- ・ その様子に、子供等は「キャッ」と声を立てながら、畑の中に、べったり座り込みました。(A33)
- ・ のろまで人一倍恐がりの私は船にも乗れず、「どうする、どうする」とただうろたえるばかりであった。一人浜辺にとり残されたまま何分たっただろうか、とても長い時間のように思えた。(B5)
- ・ 田で麦かりをしていたところ地震がきて立っておれなかった。そばにいた母が孫2人を脇に抱えて畦道に伏せた。(B18)

地震開始後、揺れの中を避難した人は合計19名であり、その割合は、自宅、職場および屋外の被災者についてそれぞれ25.0%、職場22.2%、18.2%であった。学校(学生)と他人の家での被災者には避難した人はいなかった。避難場所については、島勝、白浦、賀田といった山が海岸に迫っている集落では裏山や墓地などの高所が多いが、尾鷲湾地区、引本といった山が遠い地区では広場や浜といった広い場所が多い。尾鷲湾地区で高所に避難した人は、市街地にある中村山の麓に住む人のみであった。また、避難した19名のうち、8名が津波終了後まで避難先に留まっていたが、8名は被災場所に戻った後、改めて津波から避難、1名はより高所に避難している。残りの2名は、高所にある自宅に戻り、津波終了後まで留まっている。

屋外に出た人が地震開始後に見た建物の様子については、次のような表現がある。

- ・ 一間くらいはなれているトコヤさんと、その道の向かいにある家の瓦と瓦が道の真真中でくつつくぐらい大きな横揺れになってきた。(A2)
- ・ 家家の屋根の瓦が、ゆれていて、屋根から土煙が上がっているのが見えました。(A8)
- ・ 引本の方をみると、魚市場から向こうの封翠楼のあたりが、土煙をたてて海中へ

落ち込んでいくのが見えた。(A14)

- 大きな地震、すごい横揺れで、屋根の石が落ちたり、海岸の石垣がくずれる音がした。(A17)
- 酒を飲みすぎた人がひよろひよろするような歩き方で、横揺れのすごい地震のなかを走って逃げた。(A18)
- 家がだんだん前のほうへ傾いてきて、海水が家の中へ入ってきたので、夢中で窓から飛び降りた。(A24)
- 震の最中、道を隔てた向こうにある対翠楼や和泉さんの家が土煙をあげながら海へ落ち込んでゆくのが見えた。(A25)
- その家とその前の家の小屋根同士がぶつかるぐらいの大きな揺れだった。(A26)
- とんりの対翠楼が、土煙をあげて海へ落ちかかっていた。(A27)
- 対翠楼が水しぶきをあげて海の中へ落ちて行くのを見た。(A29)
- 北町では、隣どうしの屋根がぶつかりあうというひどいゆれ方であった。(B1)
- 家が崩れたので壁が落ち、その壁土がもうもうとした土煙となって、立ちのぼり海岸埋立て地（現在伊藤石油ビル）の近くで、地割れができ水を噴き上げていた。(B1)
- どうか広場まできた時海山町引本町の旧魚市場隣のにしき楼という料理屋だったと思いますが、凄い音と共に白煙を上げて海中に沈んでいくのが見えました。(B8)
- 矢浜の方を見たら屋根の棟が崩れている家が4～5軒あった (B16)
- そのとき地震が揺って、隣の道へ出たとき、家と家が引付くように見えた。(B29)
- 新道から浜の方を見ていたら、八幡神社のところにあった山本鉄工所の建物が大きく傾いて崩れていった。(B38)
- その時学校の前の2階建の家が崩れるように、ものすごく揺れていた。(B44)

これらの表現からは、建て混んだ建物が激しく揺れている様子がうかがえる。A25、A27、A29、B8に書かれている対翠楼という建物は、引本の築地に昭和6年に建てられた旅館であるが、文章から建物が倒壊したのではなく、埋め立てられた海岸が崩れたために海に落ちたものと考えられる。またA25の「和泉さんの家」というのは、A24の住宅である。

また、戦時中であったため、

- 当日、食事を済ませて工場で機械の運転していたが急に大きな音をたててやってきたので、戦時中のことなので爆撃やと思って避難して、地面に伏せた。(B16)
- 私は、その時空襲やと思って、又爆弾がどこかに落ちたように感じた。(B41)

4-1-2 地震終了後の行動

Figure 1 consists of six bar charts showing the number of people (in thousands) who moved to various locations during the Great East Japan Earthquake. The charts are categorized by whether the movement occurred immediately after the earthquake (Initial Movement) or after a full evacuation (Full Evacuation Movement). The Y-axis represents the number of people in thousands (トリップ).

自宅 (Home):

Category	全行動 (Full Evacuation Movement)	最初の行動 (Initial Movement)
避難	24	13
帰宅	12	8
避難先へ戻る	9	4
家族の別荘	5	4
近所に泊る	5	3
避難先へ戻る	3	2
近所に泊る	1	1
近所に泊るなど	4	1
近所に泊る	1	1

職場 (Workplace):

Category	全行動 (Full Evacuation Movement)	最初の行動 (Initial Movement)
避難	3	1
帰宅	8	7
避難先へ戻る	2	2
職場に留まる	4	4
職場に泊る	4	3
近所へ戻る	1	1

他人の家など (Others' homes, etc.):

Category	全行動 (Full Evacuation Movement)	最初の行動 (Initial Movement)
避難	3	2
帰宅	4	3
近所に泊る	1	1
家に泊まるなど	1	1
手伝い	1	1

学校 (学生) (School (Students)):

Category	全行動 (Full Evacuation Movement)	最初の行動 (Initial Movement)
避難	1	1
校庭	3	3
帰宅	2	2
手伝い	1	1

屋外 (Outdoor):

Category	全行動 (Full Evacuation Movement)	最初の行動 (Initial Movement)
避難	8	4
帰宅	8	4
避難先へ戻る	2	1
他人の家などに泊る	1	1
下泊	1	1
学校に泊る	2	1
家族の別荘	1	1
近所に泊る	2	1
近所	1	1
避難先へ戻る	1	1
近所に泊る	1	1

被災場所記述なし (No description of disaster site):

Category	全行動 (Full Evacuation Movement)	最初の行動 (Initial Movement)
避難	3	2
近所に泊る	1	1
記述なし	3	3

(図5) 地震終了後の被災者の行動

の行動には、すべての被災場所で避難が見られるが、自宅と自宅以外の被災者では、避難と帰宅の割合に違いがみられる。自宅での被災者には、全行動66トリップ中、避難24 (36.4%)、帰宅12 (18.2%) と避難が多いが、自宅以外の被災者では、全行動74トリップ中、避難18 (24.3%)、帰宅23 (34.8%) と帰宅が多い。また、最初の行動としても自宅での被災者が44トリップ中、避難 (直後避難) 13 (29.5%)、帰宅 9 (20.4%) と避難が多いが、自宅以外の被災者では、54トリップ中、避難 8 (14.8%)、帰宅19 (35.2%) と帰宅の方が多い。

自宅での被災者には、「地蔵さんの前位で地震はおさまった。家へ帰ったら、壁が落ち、家中めっちゃめっちゃで、店の棚がひっくりかえり、主人も出征中でどうなるかと思った。」(A17)、「八幡神社のこの、福西製材所の空き地へ逃げた。地震の止むまで待って、おさまったので家に帰ってきいよって、あの八幡橋は昔は土橋やった。」(B24)、「地震のときは、自宅におったが、広いところへ逃げなあかんと言うことで、浜へ逃げた。地震が収まってから、家へ帰った。」(B38) のように、地震がおさまった後、避難先や屋外から帰宅したというだけで、帰宅の際に家や家族の安否を気づかかった表現は見られない。それに対して、自宅以外の被災者には、「自分の家も見えておかな、あかんと思い」(B7)、「私の所には、前日名古屋から伯母が病氣療養のためきていて、寝ていました。」(B2) のように家や家族の安否を気づかかったものが見られる。また、「事務所から道具を片付けて家に帰りなさいという命令があった」(B41)、「学校にいるとき大きな地震がきたので、すぐ家に帰るようにということで、走って家に帰った。」(A36) のように職場や学校から帰宅を指示されたという表現も見られる。

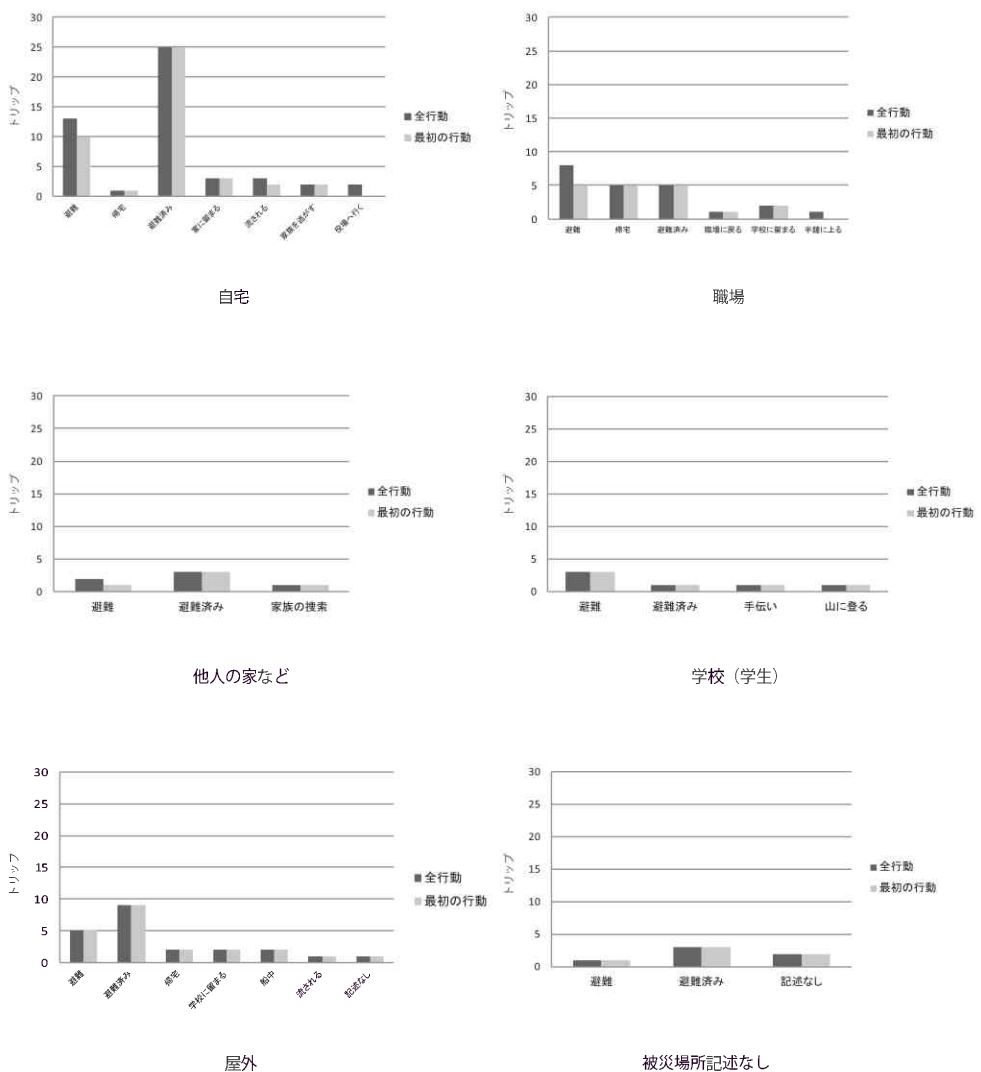
学校 (学生) では、どの行動にも全行動のトリップ数と最初の行動に差がない。学校における学生の被災者数は少ないが、地震終了後の行動について「長い長い揺れが終わった。先生の「外へ出よ!」の声で、みんなは日頃の訓練どおり履物をはいて外へ出た。」(A12) のように普段から避難訓練が行われていたという表現が見られる。ただ、この訓練は地震に対するものではなく、空襲に対するものであったと思われる。他の場所で被災した人にも、「地震と津波は不意打ちに来るが、それでも当時は本土空襲下の戦時体制で、敵の爆撃を想定して「隣組」の組織があり、命令系統がはっきりしており、非常時ということで、自然災害に対しても少しは備えがあった。空襲を覚悟していたので、災害へのところがまえがあった。」(B2) といった被爆という戦争災害への対処が、地震・津波という自然災害への対処に結びついたという表現が見られる。

また教員の体験談にも「長い長い揺れが終わった。先生の「外へ出よ!」の声で、みんなは日頃の訓練どおり履物をはいて外へ出た。」(A12)、「歩くのさえ困難で危険

であったが、先生の適切な指導と、子供等の規律ある機敏な行動で、全員事故なく避難出来たことは、この上もない幸せであった。」(A21)、「子どもたちは、脚がすくんで、階段が下れないので、困ったと口々に叫んでいた。すぐ点呼をとらせ、先生に児童数の確認をしてもらい、異常なしと、わたってみんな、ようやく安堵した。」(B46)という表現が見られる。

4-1-3 津波来襲後の行動

図6は、津波来襲後の被災者の行動のトリップ数を表したものである。この時期に



(図6) 津波来襲後の被災者の行動

おいては、どの被災場所においても避難済みが見られ、自宅での被災者については、避難済みの割合が全行動49トリップに対して25と61.0%を占めた。また、避難は13 (26.5%) であったが、この時間帯に避難を行った12名のうち、3名が水に浸かっており、「長男を背負って軒下へ出たとき、すぐ目の前に、こんな形をした大波が見えた。次の瞬間、どのようにして、どうなったか全然覚えがないが、気がついたら、二階の大屋根の上にいた。」(A19)、「2階からおりて玄関まで出たら水がどんどん入ってきて腰まで水につかり、外の溝に足を突っ込み倒れそうになりました。その時水際で大きな声で、逃げろ、逃げろ、と佳民に声をかけている海軍さんが私をみて、水の中に入ってきて私を引っ張り上げてくれました。」(B20)、「部屋の中で1呼吸、2呼吸そのとき幸いにも、硝子戸が一枚ふわりと開いた。そこから潮に乗って泳いだ。自分が来ないので、案じてくれていた人々の顔。若者が差し出してくれた棹をもち高台にかけあがった。」(B21) と辛くも助かった様子を表現している。なお、地震終了後に避難した人には、水に浸かったという表現は見られない。

自宅以外の被災者については、避難済みが全行動62トリップ対して21 (33.9%)、避難が19 (30.6%) で、自宅で被災した人に比べて避難を終えていた人は少ない。さらにこの時間帯に避難した18名のうち10名が地震終了後、あるいは津波来襲後に帰宅してから避難をしている。中には、「一旦銀行へ引き返しました家へ帰ってくる頃には、地震は止んでいました。そのころ既に家の前の川へ物凄い勢いで波が、押し寄せて来ていました。これは、きっと津波だと思い、伯母を引きずるようにして、裏から逃げました。途中波は私たちを追うように後から追って来ましたが、どこまでも、波が追って来るように思って、上へ上へと逃げました。」(B7)、「工場の中に入っていったら、津波じゃ～とおめいてきたので、そんなり、自宅へ帰り、家族を連れて、中学校へ避難した。」(B50) のように、津波来襲を知りながら家族を助けるために危険を犯して帰宅した人もいる。

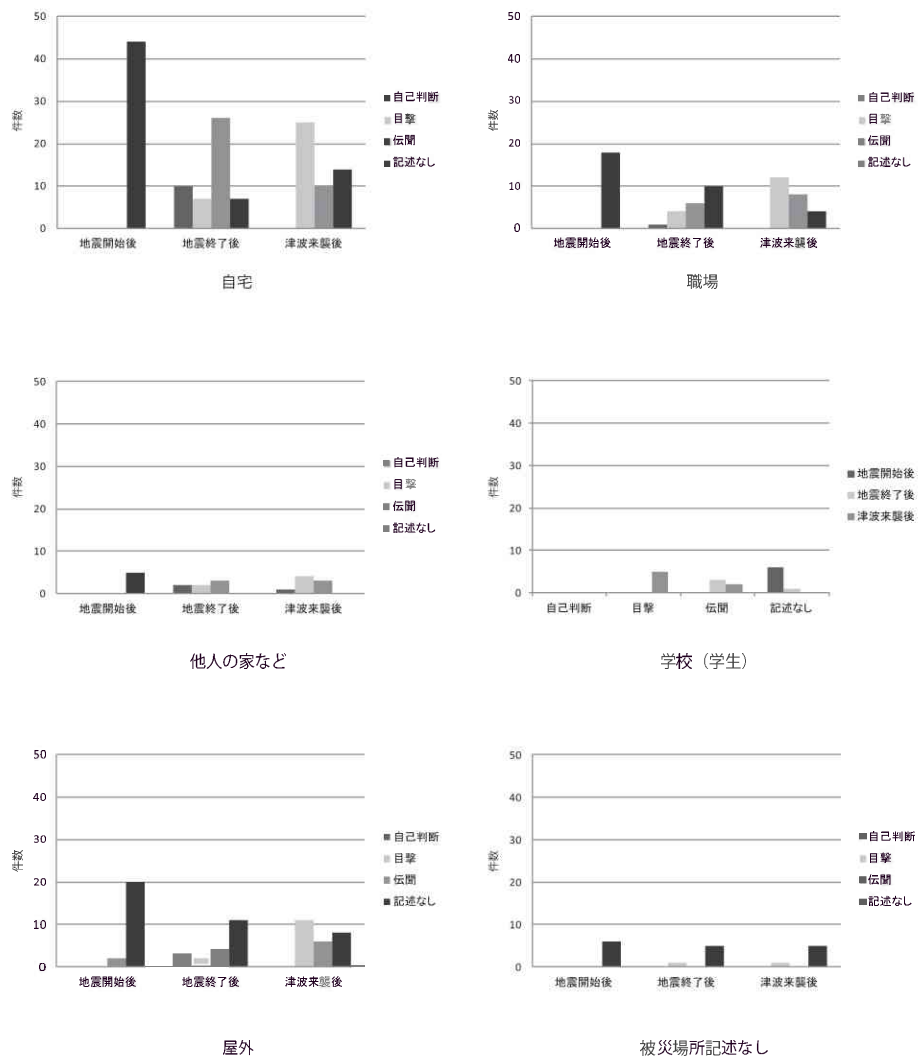
4-2 津波情報の取得時期と取得方法

4-2-1 津波情報の取得時間帯と被災者の行動

図7は、各時間帯において被災者が取得した地震情報の件数である。地震開始後には、津波情報の取得に関する記述はほとんど見られない。これは、被災者が地震の揺れの恐怖で津波について考えることなどできなかったことを表すものであろう。

地震終了後には、全時間帯に得られた津波情報の半数が得られていたが、すべての被災場所において伝聞が最も多く、特に自宅での被災者に多いことがわかる。自宅での被災者が伝聞により津波情報を得た場所は、屋内が11名、屋外が9名であり、屋外にいた9名中7名が浜にいた人から情報を得ている。またこの体験談集には、自宅以

1944年の東南海地震と津波の体験談に見る被災者の避難行動

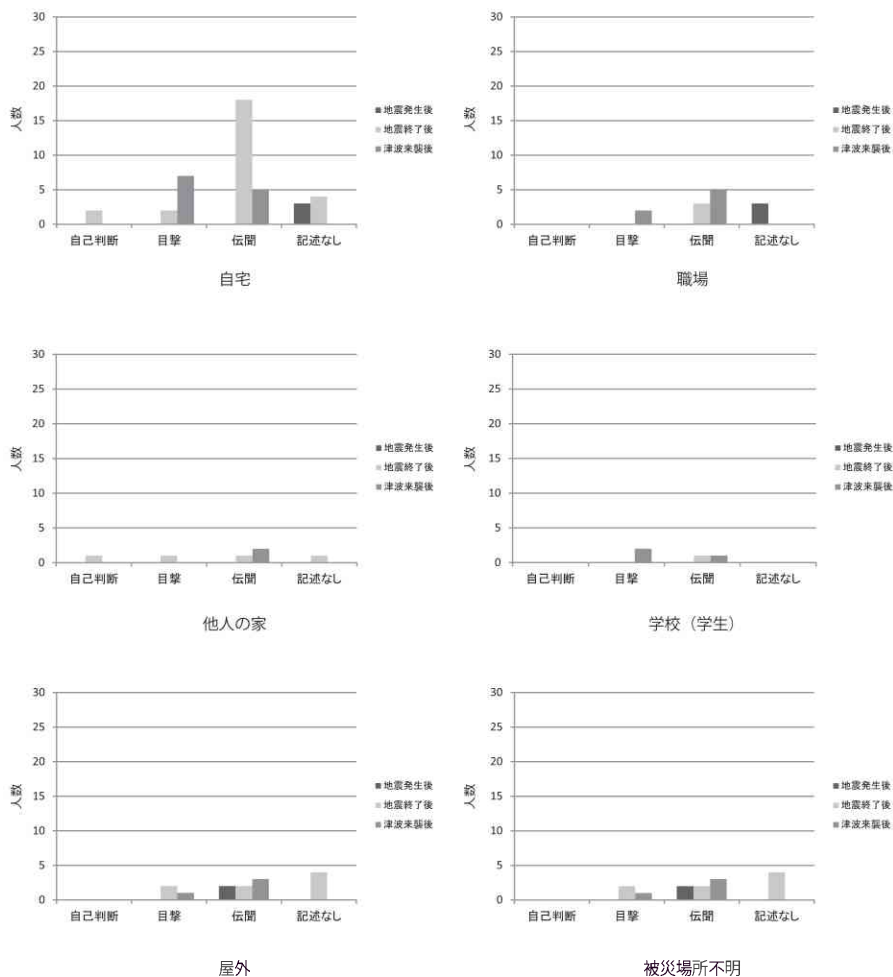


(図7) 被災者が取得した地震情報の件数

外での被災者の記述にも浜に出た家族や、「津波が来た」と叫びながら浜から走ってきた人から情報を得たという表現があることから、実際には多くの住民が地震の後に津波が来る可能性があることを知っており、兆候の確認のために浜に出ていたものと考えられる。

4-2-2 最初の津波情報を取得後の行動

図8は、最初の津波情報を取得した後に被災者が取った行動を取得方法別に表したものである。図8より、地震終了後、自己判断により津波来襲を予想した被災者は少



(図8) 津波の一次避難のきっかけとなった津波情報

なく、また予想したとしても自宅で避難準備を行った人や自分の目で津波の兆候を確かめようと浜に出た人が多く、すぐに避難した人は2名のみであったが、地震終了後に津波来襲を他人から聞いた後、すぐに避難した人は多数いたことがわかる。この理由については、当時、尾鷲地方の住民に「地震が起きてからすぐ津波は到達しない」という認識があったことが深く関連していると考えられる。体験談集には、この認識を示す次のような文言が多くみられる。

- 昔から、地震がきて二時間後ぐらいに津波が来る、と伝えられていましたが、この津波は直ぐにきました (A8)
- 地震が来てから津波までの時間はいままでの言い伝えでは「45分間ぐらいあり、

ご飯が炊ける」といわれてきた。(B2)

- 古老の話では、地震後津波が来襲するまでご飯を炊く位の暇があると聞いていたが、それが15分も経たない内(児童にそんな話をしていた)に町民が津波だと避難して来たのには唖然とした。(B15)
- 子どものころ、母から昔話の1つとして、地震のあとには津波がくるまで、ご飯を炊くひまがあるから、そのうち逃げればいいと聞いてました。(B20)
- 昔から地震が起ってから津波がくるまで時間があるので、ご飯を炊いて逃げたらよいと聞いていたが、早かった。昔の津波は遅く来たかしれんが、そんなひまはなかった。(B24)
- 地震から津波までの時間があると聞いていたが、流れた人の中には、時間があるというので、荷物をまとめていた人もあったようです。(B25)
- わしえいのおじいさんらは、地震から津波まで御膳を食べる間があったさかいに、落ち着けと言われていた。(B26)
- 昔から地震のあと津波はくるのに、ご飯を炊く暇があると聞いていた。あのときは早かった。(B35)
- 昔から地震のあと津波がくるまで、ご飯を炊く時間があると聞いていたが、そんな時間はなく、20分ぐらいで、津波がきたように思う。(B38)
- 父はこんな大きな地震のときは、あと津波が怖いので、母に避難するときは、ご飯を一釜炊いておけと言って、海に気を配っていたが、ご飯を炊くひまなかった。(B40)
- うちのばあちゃんの話では、私達こどもの時、きかされたのは、地震が揺ってから津波が来るまでに、ご飯を炊いて食べて、それを弁当にもって、逃げるだけの時間があったと、言っていました。今度のは、15分から16分で津波がきたように思う。(B41)
- 昔から、地震から津波までの間にご飯を炊くひまがあると、聞いていたが、そんなに時間がなかったように思う。(B43)
- 私の聞いている話しでは、津波は、地震が起こってから、ご飯を炊いて食べて、ゆっくりしてからくると言うのを聞いておった。(B45)
- 津波が来るまでにご飯を炊く時間等ありません。(C6)
- 津波の第一波から第二波までの間にご飯など炊きどころじゃなく逃げた。(C7)

これらの文言から、当時、この地域の人々は、地震終了から津波来襲まで「ご飯を炊く時間がある」と信じていたことがわかる。「ご飯を炊くだけ時間がある」という文言は、安政元年(1854年)11月4日の南海地震を記録した「大地震に付湊波来週模

様記録」(紀州牟婁郡奥熊野尾鷲組 天満浦長浜 御○屋長吉) (*○の部分の文字は、判読不能)に「当年迄148年以前宝永4年(1707年)10月4日大地震に付き津浪有之候由其節(そうろうよしそのせつ)は地震納り候てよりめし1鍋もたき候程の間有」という記述に見られる。宝永の津波については、宝永海嘯ノ記(ほうえいかいしょうのき)にも地震後約1時間後に、また安政元年(1854年)11月5日の津波については、九木浦庄屋御用留にやはり地震後約1時間後に来襲したとある。すなわち、過去の津波の来襲時間が、約240年前の宝永の津波の来襲時間を表した言葉そのままに、この地域で語り継がれてきたのである。したがって、前回の安政の津波から90年を経て発生した東南海地震においては、地震後15分後という早い津波の来襲に皆が驚いたのである。また「地震から津波までの時間があると聞いていたが、流れた人の中には、時間があるというので、荷物をまとめていた人もあったようです。」(B25)という表現からも、この伝承が直後避難を遅らせ多くの犠牲者を出した最大の原因であると考えられる。

4-3 津波の犠牲となった人の行動について

本研究で分析した3つの体験談には、津波の犠牲となった人の行動について次のような表現がある。

- ・ お産していた人が、子どもは父親がだいて高いところへ非難して、人に預けておき、家内を連れに行ったら、家ごと流されて無かったそうです。(A15)
- ・ 地震が来ていち早く高所へ避難した人たちは無事であったが、なまじまだ余裕があると思って家財道具を持ち出そうとして戻った人は、意外に早く押し寄せた波に巻き込まれた。(B2)
- ・ 地震の後、津波なんかくるものかといっていた人が、2名なくなった。(B6)
- ・ 死亡したのは、一旦水が引いたので、物を出しに行ってその悲劇に会ったというのが北町の状況です。(B9)
- ・ 母が此処にたどりつく迄に出会った人に「はよ逃げないと津波が来るよう」と言ったのに、家に荷物を取りに戻って流され、とうとう死体は、あがりませんでした。(B10)
- ・ 姉は魚売をしていて、学校の前から当時浜へ、行なくても良いのに、市場のところにいただき納屋があって、そこへ計器を忘れたので、それを取りにいった、私の家の玄関さきで、計器を持ったまま死んでおった。(B25)
- ・ 大きな荷物をおいてねて死んでいたが、1度逃げて、荷物をとりにもどって、逃げ遅れて死んだように思う。(B25)

- 死んだ人は避難するのにその方向を間違えたようです。それは、すぐに山に逃げないで海岸沿いに走ったのでしょう。逃げるのも遅かった。(B26)
- 一旦逃げておいて、2度目の波にのまれた。あれは、欲をだしたんやろな。物を捜しておって、家ごと奥へやられた。(B26)
- 1人は、海軍の集会所へ、行って大事なものをとってでようとして、波に押されて、第1波のときは、表の部屋で死んでいたが第2波では、そこ壁に穴があいており、流されて、死体は高町のほうで、上がった。(B26)
- 妹は自分の家に老人がいたので、大きな地震がきたら、津波があるぞと、聞いていたので、自分の受持の書類を持って逃げて、友達にも津波がくるから、逃げよらいと言ったのに、その人達は妹の言うことを信用せずに、2人共流されたが、妹は、老人の言うことを、信じて助かった。(B28)
- あの時、津波から逃げるのに、津波を背にして、賀田奥の方向に逃げた人は、死亡しており途中で、高台に逃げた人は、助かっている。(B33)
- 第1波で皆逃げたようであるが、第2波が来る前に物を取りにもどって、死んだ人がようけおった。(B34)
- この裏の夫婦とか、八幡大橋を病人をおんで渡っていて流された。親子で流された人もあった。(B37)
- 新町では、長屋のお婆さんが、一人死んで、お婆さんは、米を持つのに米を入れていて逃げ遅れたようだった。(B40)
- 死んだ人は1度は逃げたが、大丈夫と言うことで、荷物を取りに行行ってやられたと聞いている。(B42)
- 児童が、家と家に挟まれて死亡していた3年生の子供が父の位牌をカバンに入れてお母さんを捜す。お母さんは、子供を捜す。そのうちに、流されて、家の壁と壁に挟まれて死んでいた。(B44)
- ちょうど昼ご飯を食べていたんだそうで、お父さんがいないと言うので、お父さんを捜しに行行って、又お父さんも子供を捜しておって2人とも津波に流されて死んだ。(B44)
- 波に流されて死んだ人は、たいてい、1回目の津波のあと波が引いたので、これ忘れた、あれ忘れたと、物をとりに戻って、死んだように思う。(B44)
- 今の富士モータの前の方は逃げ遅れて死んだと聞いている。(B45)
- 屋根の上で手を上げながら波に飲み込まれていくのを見ました。(C6)

これらの表現から、物を持ち出そうとして時間を失い最初の津波に巻き込まれた人(B2、B25、B26、B40)とともに、第1波が去った後で物を取りに戻ったため第2

波の津波に巻き込まれた人も多かったことがわかる (B9、B10、B26、B34、B42、B44)。ただし、当時、津波の第2波の危険性について知っていた人もいたことが、「[今降りたらあかんど。津波の恐ろしさは2回目じゃど]と漁師のおじさんが、声を潤らして叫んで回った。」(B11)、「1回目の波は土地の低い所などに水が溜まりながら来るので遅いが、2回目はそれがないので、波が速くなる。中川(なかご)はずーと奥まで波が来ていると思うが、矢ノ川は、岩神の奥まで来ているし、樋の口の下まで来ていた。」(B49)という表現からわかるが、このような知識があった人は少なかったものと考えられる。

4-4 地形的な危険性について

また、これらの体験談集には、尾鷲周辺のリアス式海岸の地形的な危険性として、川と湾の奥を指摘した表現も多い。川については、

- ・ 間もなく宮さんのすぐ下の川まで潮がのぼってきて「ここもあむないぞ」というので、寺へ逃げた。(A2)
- ・ 津波は川沿いに水が先に来ました。(A6)
- ・ 津波の第一波は、地震から約十八分位で襲来、里の谷川に沿って、海水が洪水の押し寄せるように、奥の方へ流れ込んだ。浜辺付近と川に沿った曲がり角までの家屋は流失 (A21)
- ・ 道路に沿った川を赤茶色のどろ水に乗って、家がころころ転がるようにまくれてきますし、家の柱か何か、丸太が縦にまくれてくるではありませんか。(A33)
- ・ 急に津波がやってきて、物凄い勢いで川の水が上流へ流れ始めた。(A36)
- ・ 障害物が何もない北川を逆流するときは、港につながれていた大小の船舶はもちろん、駐留していた海軍の警備艇までも船団を組んだように運んできた。(B2)
- ・ 避難するときも、川筋を通ことは避けなければならない。(B2)
- ・ 小久兵衛谷川には津波で押し上げられた漁船が三隻程狭い川に折り重なるようにして無惨な姿をさらけだしてあった。(B3)
- ・ 節の川原(北川)を見ると海水が逆流し大波が堤防を越えて来るのが見えた。(B4)
- ・ そのころ既に家の前の川へ物凄い勢いで波が、押し寄せて来ていました。(B7)
- ・ 丁度真ん中あたり迄きたとき、銚子川の河口である引本湾に向かって、5、6軒の住宅が流れて来るのが見えました。(B8)
- ・ そのとき川を渡ることを意識していなかった。川は怖いということを知らなかった。上川原町を歩いて行きて、丁度コロナさんの前を歩いて、宮前橋へ向か

いましたが、橋の所まで来たとき、第1波の波に会った。それまで全然津波らしい傾向がなかったのです。(B9)

- 波の数を数えていませんでしたが、川を遡上する波の勢いは、すさまじいものでした。(B9)

といった表現が見られる。湾の奥については、

- 津波の波高は、外洋では水深がふかいので、たいした高さにならないが、水深の浅い尾鷲湾のようなV字形の湾奥は、進むにつれていちじるしく波高が高くなり、スピードを増す。(B2)
- 例えば板に水を流した場合、突き当たったところは、高くなりますが、津波もそれと同じで、湾の奥ほど波が数倍も高く被害も甚大でした。(B8)
- 海山町の小山では、津波も少して湾奥の矢口が大変な被害を受けたように記憶しております。(B8)
- 我が部落は九鬼湾の西、字名占として10世帯ぐらいの小部落だった。V字型の奥だったので津波の被害が大きかったようだ。そのころは現在の九鬼駅は遠浅だった。(B21)
- あの時、津波から逃げるのに、津波を背にして、賀田奥の方向に逃げた人は、死亡しており途中で、高台に逃げた人は、助かっている。(B33)

といった表現が見られる。尾鷲市九鬼と須賀利で、この地震による津波を経験した人から筆者が聞いた話によると、九鬼では九鬼湾北側の湾に沿った地区では大きな被害がはなかったが、B21のように湾の最奥部や埋め立て地の被害は甚大だったとのことである。また、須賀利では、小さい頃から「津波から逃げる際、絶対に湾の奥に逃げてはいけない。」と教えられてきたとのことである。

5. まとめ

本研究では、1944年12月7日に発生した東南海地震における三重県尾鷲地方の被災者の行動を3つの体験談集の記録から分析した。これらの体験談は、震災から40年以上過ぎてから作られたものなので、収録されている体験談も100程度であったが、被災者の記憶は地震発生から津波来襲に至るまで鮮明なものが多く、地震発生後、地震終了後および津波終了後の行動や、津波情報をいつどのようにして得たのかを知ることができた。

まず、自宅や職場など屋内での地震被災者には、揺れの中を屋外に脱出した人が多かった。また、自宅での被災者のうち、地震終了まで屋内に留まった人の中にも「2階にいて階段を下りることができなかった」などという表現から、屋外に脱出した人の方が多かったと思われる。地震終了後の行動には、被災場所により違いがあることがわかった。自宅での被災者の行動には避難が最も多かったが、自宅以外の被災者には帰宅が最も多かった。津波来襲時には、体験談を語った人、すなわち津波の犠牲とならなかった人のほとんどが避難を終えていたが、この時間帯に避難を試みた人の中には、津波に流され危うく命を落としかけた人もいた。

津波からの一次避難のきっかけとなった情報として、地震開始から津波来襲までの間に「地震の後に津波が来る」と自己判断した人は少なく、たとえ判断したとしても、それが一次避難のきっかけとはならなかった。また、すべての時期において、津波情報を伝聞により取得した人が最も多かった。これは、避難する人の叫び声や、浜に海の様子を見に行った家族の警告を聞いたものであり、地震終了後に「津波が来る」という声を聞いて、すぐに学校や裏山などの高所避難した人が多かったことがわかった。

この2つの分析結果から、この東南海地震において、被災者の多くは、地震終了後に迅速な津波避難は行わず、また津波の早期来襲を考えることもなかった。これは、体験談中で被災者の多くが、地震終了後、約15分で津波が来襲したことに対する驚きを「地震から津波来襲までご飯を炊く時間があると聞いていた」と表現しているように、当時、尾鷲地方には200年以上前の津波に関する伝承が広く信じられたことが背景にあったと考えられる。2011年の東日本大震災について、内閣府が、岩手県、宮城県、福島県の3県で870人を対象に行ったアンケート調査によると、57.0%に当たる496人が地震終了後に直後避難をしている^{文8)}。しかし、すぐに避難しなかった人の理由として、「自宅に戻ったから」が22%、「過去の地震でも津波が来なかったから」が11%を占めている。また、昭和35年のチリ地震津波の経験者で、「2階にいれば大丈夫だ」と判断して亡くなった人もいる。帰宅行動や過去の経験や伝承による誤った判断が、直後避難を遅らせたことは、半世紀以上前の東南海地震と一致している。

現在、地震調査研究推進本部事務局（文部科学省研究開発局地震・防災研究課）は、今後30年以内に70%程度の確率でマグニチュード8から9レベルの南海地震および東南海地震が起ると発表している。1944年の東南海地震では、科学的な根拠がない江戸時代からの伝承が津波避難を遅らせたが、本研究で分析した3つの体験談集には、下記のような被災者の実体験に基づいたアドバイスもある。これらには「迅速な高所避難」といった東日本大震災後に津波避難の鉄則として改めて認識されたものも含まれており、今後の津波避難の参考としなければならない。

- 安全地帯でじっとして、もう津波は絶対こないといわれるまで動かないことである。地震のあとすぐ津波が来ると思ってもよい。ご飯を炊くひまなどなく、何をさておいても避難することである。上陸した津波のスピードは100 m12秒と非常に速いからうろうろすると波に巻き込まれる。とくに、川原町・新川原町は北川の河川敷であったから土地が低く 波のくるのはどこよりも早い。避難するときも、川筋を通ことは避けなければならない。そして、1 m でも高い場所を選ぶこと。(B2)
- ふだんから津波が来たらどこへ逃げたらよいか、十分考えておくことである。あまり家財道具を気にすると、どうしても逃げる速度が鈍る。品物と人命がどちらが尊いか、よく知らなければならない。とくに、女や年寄り、子どもは背負うか手を引くかして、絶対に眼を離さないことである。(B2)
- 私はみなに言うのですが、地震が揺れたら何をおいても、山の手へ逃げなさいといっています。(B9)
- 逃げるのであれば、山の手へ逃げる川を越えてはいけないこと、川はいくら高く嵩上してあっても、川には一番先に潮が押し寄せてくる。(B9)
- 現在は、各自避難場所を決めておくことが大切です。それと何もとらんと逃げることです。(B9)
- 当時は車がなかったので、避難するのにかえって都合がよかったと思いますが今後あのような事態が起きたとしたら車の通行は被害に一層の拍車をかけるのではないかと大いに気になります。(B19)
- 今グラッときたらすぐ火元へ飛びます。次に出口をあける。そしてあわてず状態を見て行動します。テレビ、ラジオの情報をしっかり聞いて判断して、逃げ遅れないことです。(B20)

注1) 例えば、東日本大震災の津波委被災現況調査結果(第3次報告)(国土交通省都市局外 炉交通施設課、都市計画課、平成23年12月)、東日本大震災に関する市民アンケート調査(仙台市、平成24年3月)、宮城県沿岸部における被災地アンケート調査報告書(株式会社サーベイリサーチセンター、平成23年5月)など

注2) 文3)の「東南海地震から50年」では、南輪内地区(賀田、古江、曾根、梶賀)の死者数はカウントされていないが、文2)の「昭和地震史」(倉本為一郎編著、昭和24年12月)には、この地区で23名の死者が記録されている。また、「平成十三年十二月 東南海地震体験談集」では、九鬼、早田の死者が4名とあり、現尾鷲市の死者を倉本の記録と合わせて死者数を65名としている。なお、この地震による三重県全体の死者・行方不明者は589名であった。

注3) 津波デジタルライブラリは、津波に関する内外の論文、新聞記事、体験談などの文

献や映像記録などが収められたデータベースである。現在、相模女子大学学芸学部准教授である今井さやか委員長の他、4名の委員から構成されている。URLは、<http://tsunami-dl.jp/>である

注4) 体験談のインタビューに応じた時の最年少者は55才、最高齢者は99才であった。

注5) 本論文における体験談集からの引用については、体験談集にあった言葉づかいをそのまま記述している

【参考文献】

- 文1) 千年震災 繰り返す地震と津波の歴史に学ぶ：都司嘉宣、ダイヤモンド社 (2011年5月)
- 文2) 昭和地震史：倉本為一郎、南輪内村震災記念会 (1949年12月)
- 文3) 東南海地震から50年 [尾鷲を襲った地震と津波]：尾鷲市立中央公民館郷土室、pp 12 (1994年12月)
- 文4) http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1944-tounankai/JISHIN/pdf/10_chap6.pdf：報告書 (1944東南海地震 1945三河地震) - 内閣府、第6章 戦時下での地震、pp 175 (2007)
- 文5) 安政・昭和南海地震時における津波避難行動に関する一考察：井若 和久、上月 康則、花倉 僚介、土木学会論文集 B2 海岸工学、66(1-2)、pp 1306-1310 (2010)
- 文6) 人間の津波認知から明らかになった避難のあり方——1944年東南海地震・被災者体験談をもとにして：木村 玲欧、歴史地震 (23)、pp 131-141 (2008)
- 文7) 昭和19年12月7日 東南海地震に関する踏査報告：愛知県防災会議、p 33 (1975)
- 文8) <http://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/tohokukyokun/7/pdf/1.pdf>：東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会 第7回会合資料 (2011)
- 文9) http://www.jishin.go.jp/main/pamphlet/wakaru_qa/wakaru_qa5.pdf：東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会 第2回会合 (2011)